この問題は、2025 年度以降の一般選抜における「総合問題」をイメージするために作成したサンプルであり、実際に出題される問題とは異なります。（早稲田大学社会科学部）

総　合　問　題

（問　題）

20XX 年度

＜Sample 60 分間＞

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は 2～14 ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、ＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
   (1) 印刷されている受験番号が自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること
   (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。
5. 記述解答用紙記入上の注意
   (1) 記述解答用紙の所定欄（2 カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
   (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
   (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
7. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
8. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
9. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
10. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

Ⅰ

問題文 A、B を読み、問 1〜5 および問 7 について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマーク解答用紙にマークせよ。問 6 の解答については、記述解答用紙の所定欄に記入せよ。

問題文 A

社会的アイデンティティ理論は、個人と社会、およびその両者の関係に関するある前提（仮定）に基づいている。それは、社会は相互に関係のある勢力と地位を意味するさまざまな社会的カテゴリーから成り立っているという仮定である。

「社会的カテゴリー」というのは、国家（イギリス／フランス）・民族（アラブ人／ユダヤ人）・階級（労働者／資本家）・職業（医者／溶接工）・性（男／女）・宗教（イスラム教／ヒンズー教）などに基づく人々の区分のことであり、「勢力と地位関係」というのは、社会のカテゴリーが勢力・威信・地位などの属性を整えているという意味である。

いうまでもなく、カテゴリーは単独では存在しないし、相互の ① でのみ意味をもっている。例えば、「黒人」という社会的カテゴリーは、黒人とそうでない人、すなわち対照的カテゴリーとの区別に寄与するのでなければ意味をなさない。個人は同時にさまざまな社会的カテゴリーの成員（例えば、男性・仏教徒・オーストラリア人・サーファーの愛好者）であるが、同時に相互に ② なカテゴリー（例えば、北アイルランドに住むカソリック教徒でありかつプロテスタント教徒）の成員ではあり得ない。

（中略）

これまで、集団間関係は、しばしば、競争的になり、敵意を生じ、対抗的にさせると理解してきた。そして、パーソナリティ・欲求不満・利己的剝奪感によるいずれの説明もそのような集団間関係の性質をうまく説明できないことが判明した。また、友愛的剝奪や目標関係による説明は、利益あるいは達成差の知覚に基づいているものだが、いずれも集団間の葛藤の必要条件はもちろん、最低の十分条件すら確認していないのである。この問題に対する解決策は、今では古典となったが、タジフェルとその仲間が「最小集団」パラダイムを工夫した時に提出された。このパラダイムは、社会的アイデンティティ理論の中心に位置づけられ、これまで数多くの実験で用いられている。そこで、その基本的な性格を概略しよう。

この実験では、「意思決定」の研究と称して被験者は集められる。最初の課題は、呈示される対の刺激の二者択一選択肢からどちらかを選択判断することである（例えば、「クレーの絵」と「カンディンスキーの絵」のどちらが好きか？）。被験者は、第 1 課題の結果に基づいて、第 2 の課題のために 2 つの集団のいずれかに仕分けされる。次いで、各被験者は単独で個室に置かれ、自分がどちらの集団の所属か知らされる。それから、小冊子が渡される。その小冊子には、自分にではなく、2 人の他者に配分する金額を表わす点数を与えるよう指示されている。2 人の他者については、どちらの集団の成員か（内集団成員か外集団成員か）ということと、彼らのコード番号（氏名ではなく）だけが示されている。被験者は、「配分マトリックス」（表 1）形式で呈示されている 13 の数字対の中から 1 つを選択して、2 人の個人に与えたいと思う点数対（金額）を示さなければな

らない。

表1. 最小集団パラダイム

配分マトリックス													
内集団成員	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
外集団成員	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25

（中略）

この「最小集団パラダイム」実験は、一貫した結果を示したのである。すなわち、被験者は、一貫して、外集団成員よりも内集団成員に多くの点数を与え、内集団の利益を最大化しようとしたのである。彼らは競争的でもあった。マトリックスは、一方の極に、内集団に最大の利益を分配するとそれ以上に外集団に利益がいく組み合わせをおき、内集団に最も多く配分するチャンスを与え、他方の極には、内集団の利得も少ないが、外集団にはさらに少ない点数の組み合わせをおいている。被験者は驚くほど、後者の方を選択したのである。言い換えると、彼らにとっては利益の大きさよりも外集団に打撃を与える方がもっと重要だったのである。

（出典：M.A.I ホッグ・D. アブラムス(著)、吉森 護・野村泰代 (翻訳)「社会的アイデンティティ理論―新しい社会心理学体系化のための一般理論」、北大路書房、1995 年所収。問題作成の都合上、表現の一部を省略・改変した。）

問題文 B

自然・社会の複雑性の中に法則を見出そうとする研究枠組みのひとつに、エージェント・ベース・モデル（Agent-Based-Model：以下、ABM と略称）がある。ABM とは、コンピューターの中に疑似的な社会空間をつくりあげ、人間、企業、国家、あるいは動植物や粒子などのように、一定の行動ルールを与えたエージェントの局所的な相互作用を考え、その結果としてどのような自然・社会現象の創発を説明できるのかを明らかにする、計算機実験の一種である。(ア)線形性を想定したトップダウンの数理解析では説明できない現象が、エージェントの非線形の相互作用を想定したボトムアップの ABM によって再現される。そこに産まれる法則を探る研究が進められている。（中略）

ABM 研究の一例として隔離モデルがある。これは、トーマス・シェリングが 1971 年に発表した論文がもとになっており、その記念碑的な研究の後、さまざまな発展をしている。（中略）。ここでその概要を紹介しよう。

いまある地域に異なる属性の人びとがいるとしよう。原典では白人（White）と黒人（Black）とされているが、アジア系やヒスパニック系を考えても構わないし、目の色・肌の色で分けるのではなく、性別や宗教、言語など、どのような属性で考えても構わない。ここでは話を単純化するため、原典に従って白人と黒人とする。そして地域を適当な大きさの 2 次元空間で考える。そして、その 2 次元空間が適当なサイズの区画で区切られている。たとえば 10m×10m の区画が縦に 7 行、横に 7 列、合計で 7×7＝49 だけある状況を考える。

はじめ、人びとが、7×7 のどこかの区画に住んでいる。今、白人と黒人がそれぞれ 15 人（世

帯）ずついるとしよう。ここで人びとは、次のような行動ルールにのっとって移動をおこなうとする仮定を置く。

ルール 1：白人も黒人も、自分と異なる人種に寛容であり、隣に住んでいる人が自分と異なる人種であっても、そのことで住み心地が悪いと感じることはない。

ルール 2：しかし、自分の周囲（縦・横・斜の区画）にいる他者のうち過半数が自分と異なる人種だと、自分が少数派だと感じ、居心地が悪くなる。

ルール 3：居心地が悪く感じた人は、近隣の居心地の良い空地に転居する。その人が元いた場所は空地になる。

じっさいは、人びとの転居がそのように簡単に進むことはないし、人びとが常に自分の近隣を気にして居心地の悪さを感じるわけではないが、このような単純な仮定を置くことが ABM の特徴である。図表で分かりやすく示すため、白人を〇、黒人を×とする。それぞれ 15 人がいる。どちらも記していない区画は誰も住んでいない場所である。

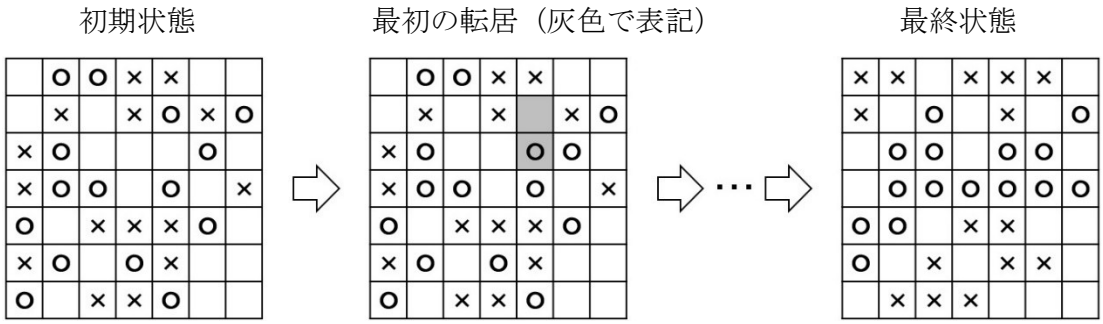

図 1. 人種の隔離の進展

ここで大事なのは、人びとは自分と異なる人種への嫌悪感を持っているわけではないということである。異なる人種の隣人が住んでいることを嫌がっているわけではない。単に、自分が近隣の中で少数派になることを嫌がっているのである。そのような穏健な人びとであるにもかかわらず、彼らの行動が集積すると、結果として人種隔離が起こってしまうのである。(イ)図 1 は、初めは白人・黒人が混合して暮らしていたのが、時間が経過すると、居心地が悪くなった人びとの行動が集積した結果として、白人・黒人の人種隔離が生成してしまうプロセスを示している。当初はじゃっかんの異人種が隣にいる程度であり、不満を持っていなかったエージェントですらも、周囲の転居が続き、その結果として今いる場所で自分自身が少数派になってしまった現状を嫌い、転居をする。このようなエージェントの連鎖反応の結果として、アパルトヘイト政策が起こっていた当時と変わらないような人種隔離が起こってしまう。

(a)

		×	×	×		
	○	×	×	×		
	○	○		○	○	
	○	○	○	○	○	
○	○	×	×	×	○	○
○	×	×		×	×	
		×	×			

(b)

	○	○	×	×		
		○	×		×	
	○	○	×	×		○
○	○		×	×		○
		×	×	×	×	
○	○	×		×		
○	○		×		○	○

(c)

	○	×	×	×		○
	○		×			○
		○	×	×	○	○
	○	○		×		○
○		×	×	×		○
○	○	×	×	×		
○		×	×			

図 2. 人種の隔離の結果：図 1 の初期状態からスタートしているが、結果は異なる

もう 1 つ大事なのは、誰から転居を始めるかによって結果が変わってくる点である。図 2 は、初期状態は図 1 と同じであったが、最終的に異なった結果が生じた事例を示している。このように、わずかな偶然のずれで、結果が大きく変わってしまう。

そしてさらに大事なのは、たしかに全く異なる結果が生まれてはいるものの、 ③ は同じであるという点である。ある場所を白人と黒人どちらが暮らすか、あるいは空地になるかを予測することは困難でも、どのようなパターンが生まれるかを予測することは可能である。これが、ABM 研究の成果である。

（出典：堀内史朗(著)「観光による課題解決」、晃洋書房、2020 年所収。問題作成の都合上、表現の一部を省略・改変した。）

問 1　問題文 A の文中 ① と ② に当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを 1 つ選べ。

a.　① 類似、② 閉鎖的
b.　① 酷似、② 相補的
c.　① 対立、② 依存的
d.　① 相違、② 補完的
e.　① 対比、② 排他的

問 2　問題文 A の表 1 の配分マトリックスから、被験者が内集団成員と外集団成員に与える点数の組合せを以下の選択肢のように選んだとする。各選択肢にはそれぞれの点数の組合せに対する被験者の意図の解釈を付してあるが、<u>適切でない</u>解釈がされているものを 1 つ選べ。

a. 内集団成員に 7、外集団成員に 1：内集団の相対利益をできるだけ大きくする。
b. 内集団成員に 12、外集団成員に 11：内集団をひいきする範囲で、内集団の利益をなるべく大きくする。

c. 内集団成員に 13、外集団成員に 13：内集団の利益よりも集団間の公平性を重視する。
d. 内集団成員に 14、外集団成員に 15：配分を公平にしようと努力しつつも、外集団の利益を小さくする。
e. 内集団成員に 19、外集団成員に 25：内集団の利益と外集団の利益を最大化する。

問 3　問題文 A の最小集団パラダイム実験から示唆されたことに関する記述として、最も適切なものを 1 つ選べ。

a. 内集団利益を追求する個人を 2 つの集団に分割することが、集団間競争の発生に十分である。
b. ほとんど属性の変わらない個人を 2 つの集団に不連続的に分割することが、集団間競争の発生に十分である。
c. 権威主義的な個人を 2 つの集団に分割することが、集団間競争の発生に必要である。
d. 差別的な考え方を持つ個人を 2 つの集団に分割することが、集団間競争の発生に必要である。
e. 利害の対立する 2 つの集団に個人を分割することが、集団間競争の発生に十分である。

問 4　隔離モデルは問題文 B の下線部(ア)の例であるが、このように、エージェント間の複雑な相互作用の結果、各エージェントが意図していないような現象が起きる例として、最も適切なものを 1 つ選べ。

a. ライン工が担当部分を組み立てることで、自動車が生産される。
b. 若者が便利な都会に働きに出て行くことで、地方の過疎化が起きる。
c. 投資家が値動きを見て株を売買することで、株価の急騰や暴落が起きる。
d. 無党派層が投票に積極的に行かないことで、組織力の強い候補者が当選する。
e. 通勤者が始業時間に合わせて電車を利用することで、通勤ラッシュが起きる。

問 5　隔離モデルでは問題文 B の下線部(イ)のような時間経過で、居心地の悪い人の数はどう変化すると考えられるか。最も適切なものを 1 つ選べ。

a. 決して増えることはなく単調に減少する。
b. 最初は必ず減少するが、その後一定になる。
c. 最初は必ず増加するが、その後単調に減少する。
d. 増減はするが減少傾向で、最後は必ず減少する。
e. 増減はするものの、最終的には元と同じになる。

問 6　問題文 B の文中 ③ に入る適切な文を 30 字以内で記せ。

問 7　社会の分断や差別を引き起こす人々の行動パターンについて、問題文 A では最小集団パラダイム実験に基づく考え方を、問題文 B では隔離モデルに基づく考え方を見てきた。以下の行動パターン(1)〜(6)はそれぞれどちらの考え方と合致するか。最小集団パラダイム実験に基づく考え方のみと合致する場合は **a**、隔離モデルに基づく考え方のみと合致する場合は **b**、両方の考え方と合致する場合は **c**、どちらの考え方とも合致しない場合は **d** をそれぞれマークせよ。

(1)　自分と同じカテゴリーの人を優遇する。
(2)　少数派集団の成員になるのを避ける。
(3)　自分と属性の異なる他者を嫌う。
(4)　自他の所属集団を気にして行動を変える。
(5)　自分と異なる集団の成員を攻撃する。
(6)　自分と他者をカテゴリー化する。

II

気候変動がもたらしつつある深刻な事態を前にして、国際的な温暖化対策への取り組みが求められている。しかし、温室効果ガス(GHG)排出量の公正な配分とは何か、GHG 削減費用や気候災害等への対処費用を誰がどの程度負担するべきか、明確なコンセンサスは得られていない。以下は、GHG 排出量をめぐる国際条約・議定書において考慮するべき点を論じた論考の一節である。これを読み、問 1〜7 について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマーク解答用紙にマークせよ。問 8 の解答については、記述解答用紙の所定欄に記入せよ。

［GHG 排出削減に関する］包括的条約の一つの主要な利点は、各国が GHG のすべての使用を見て、最小費用の選択肢を選びとることができる点だろうと想定されている。すなわち、その削減であれば経済的価値の減少が最小となるような特定のガスの特定の発生源を除去することによって、GHG 排出の削減をはじめられるだろうというわけである。こうした費用効果へのアプローチがもつ決定的に重要な特徴――私がそのアプローチを「均質化」と名づけるにいたった特徴――は、すべてのガスの発生源（あらゆるガスのあらゆる発生源）が同じ器に投げ込まれている点にある。ガスの発生源の間には、何の区別もなされず、本質的発生源と非本質的発生源の区別さえもなされない。

（中略）

標準的な経済分析にとっては、あらゆるものは選好である。美食家が少々の調味料を望むのも、飢えた子どもがわずかな水を望むのも、美術収集家がもう一枚の絵画を望むのも、ホームレスがプライバシーと暖を望むのも、すべて選好である。定量的には、それらの望みは相異なっている。その一部は、他よりも大きな「支払意思額」によって支えられているからである。しかし、定性的には、選好は選好である。数少ない目的のためには、私たちは恐らく、選好を定量的に、すなわち支払意思額という語で扱うことを選ぶかもしれない。しかしながら、人類史の進化の間に築き上げられたすべての質的区別を放棄するのを選ぶことは、洗練と繊細さという豊かな宝を私たちから奪うということである。一部のいわゆる選好は死活的だが、一部はとるに足らない。一部はニーズだが、一部は単なる欲求である（ニーズではない)。ある「選好」の充足は、生存にとって、あるいは人間の人並みの生活にとって本質的に重要であるが、他の選好の充足は、生存にとっても人並みの生活にとっても非本質的である。

（中略）

すべての温室効果ガスのすべての発生源で費用効果を計算するのはよいことだと単純に提案することは、［　①　］を無視するように提案することである。除去しようとすれば最小費用のみがかかるだろう発生源の一部が、本質的であり、その充足が喫緊であるニーズを反映しているが、除去しようとすれば最大の費用がかかるだろう発生源の一部が、非本質的であり、些末な気まぐれを反映しているならば、どうだろうか。手短に具体的な話をすれば、水田を放棄する経済的費用が、高級車の燃費を削減する経済的費用よりも小さいならば、どうだろうか。ある人々は子どもを養うために水田へのニーズをもつが、誰も高級車へのニーズをもたないということは、いかなる差異ももたらさないのか。

比較可能な重要性のある事柄を取り扱っているかぎり、(ア)<u>最小費用を第一とする原理</u>にしたがわ

ないとすれば、それは馬鹿げたことだろう。他の仕方で行動するのだとすれば、それは、より高価でない手段によって達成されただろう目標に対して、より高価な手段を選ぶことになるだろう。それは、根本的に非合理的である。しかしながら、何千ヘクタールもの水田を除去することは、それと同量の GHG 排出削減をもたらすのに十分な企業単位平均燃費の基準を引き締めることよりも、経済的術語では費用がより ② かもしれない一方で、 ③ の縮小と非効率的燃焼の削減とが人間にもたらす帰結は、生活の質への効果という点で比較可能からはほど遠い。実際のところ、食料の場合には、まさに生命が可能となるかどうかを左右する効果がある。これらは、まさに同一の目的に対する二つの相異なった手段なのではない。その二つの相異なった手段が仕える諸目的は、それらの手段によって除去される ④ の点では、まさに同一でありうるだろう。しかし、その諸目的は、他の面では、死活的な食料供給を縮小することと、奢侈品をほんのわずか費用のかかるものにすることほどに相異なっている。結果的に、あたかもその二つの手段が、排出量の同量の削減を生み出すのに各々いくらかかるかという点でのみ相異なっているかのように、均質化費用効果計算を適用することは、深刻なほどに現実をゆがめている。同量の排出削減を行うための費用という点にだけ差異があったかのようにするのは、深刻に現実を歪めている。この種の包括性は、根本的である区別――最も言及するべきものとしては、必要物と奢侈品の区別――を不明瞭にするのである。

（中略）

費用は、貧困層にとっての必要物に影響する費用と、富裕層の奢侈品に影響するにすぎない費用とに――恐らく 1 回よりも多く、しかしたしかに少なくとも 1 回は――分割されるべきである。トマス・ドレネンは、このような分割の一つのタイプを提案してきたのだが、その分割の基底にあるのは 2 種類の考慮事由である。・・・（中略）・・・ドレネンは、ガスのタイプと用途のタイプとを結合させることによって、条約の射程内にあるべきものと、射程内にあるべきでないものとの分割に到達している。ドレネンであれば議定書の制御の下においただろうガスは、二酸化炭素（CO_2）とメタンだろう。それは恐らく、これらが、人間の制御に服する、地球温暖化への最大の寄与物だからである（水蒸気はいっそう大きな寄与物だが、制御不可能である）。減少するのを彼が見たがっている用途は、「工業関連」用途であって農業用途ではない。ドレネンの戦略は、非生物的な人為起源の CO_2 とメタンを制御することである。

（中略）

私たちは、富裕層が貧困層の許容量を買い上げて、貧困層が排出許容量の不足ゆえにみずからの基底的ニーズさえも充足できないままにしておくような排出量の均質化――無差別的――市場をもつべきでない。工業関連と工業無関連というドレネンの仕切り方は、実際上は最善に近いだろう。すなわち、農業での大半の排出量は恐らく生計用であり、工業での多くの排出量はそうでない。それよりもなおよいのは――それが実際的だとすれば――、途上国の必要な工業活動を無制御なままにしておき（もちろん無測定ではない）、先進国の世界の不必要な農業サーヴィスを、その余計な工業活動とともに制御システムの下におく、より洗練された仕切り方だろう。

排出許容量の国際市場があるべきだとすれば、貧困な地域の人口には、彼ら自身が最善と考えるいかなる用途のためにも不可譲の――市場化されない――許容量が割り当てられうる。不可譲の許容量を超えたところでは、市場は魔法のごとく作用することができ、費用効果の基準は至高性をもって君臨することができる。しかし、排出許容量の市場は、十全に包括的とはならない。途上国の世

界の貧困層は、一定量の保護された排出量を保障されるだろうし、彼らはみずからが選ぶ仕方で排出量を生み出すことができるだろう。このことは、貧困層の運命を、遠く離れた見知らぬ者たちのなすがままに委ねるのでなく、貧困層にみずからの人生に対する制御の何らかの手段をもたせることになる。

（出典：H.シュー(著)、宇佐美誠・阿部久恵(翻訳)「生計用排出と奢侈的排出」、宇佐美誠編著『気候正義』、勁草書房、2019 年所収。問題作成の都合上、表現の一部を省略・改変した。）

問 1　空欄［　①　］には、本文の著者が「事実」と考える GHG 発生源の評価に関する記述が入る。以下のうち、空欄①を埋める最も適切な記述を 1 つ選べ。

a. ある発生源に対するニーズは万人に共通のもので社会的価値が高いが、他の発生源は個人的なニーズを満たすに過ぎず、評価に値しないことすらあるという事実

b. ある発生源は人々の死活的なニーズを満たすために本質的で緊急のものだが、他の発生源は本質的ではなく、些末でさえあるという事実

c. ある発生源は地域の今後の発展に欠かせない重要な役割を果たすことがあるが、他の発生源は一時的な便益しかもたらさず、末梢的ですらあるという事実

d. ある発生源に対しては高い支払意思額が示され重要性が認められるが、他の発生源に対する支払意思額は低く、取るに足りないこともあるという事実

e. ある発生源は温暖化への寄与が大きく優先的に削減努力がなされるべきであるが、他の発生源は必ずしも早急な対処が必要なわけではないという事実

問 2　空欄［　②　］、［　③　］、［　④　］に入る語の組み合わせとして最も適切なものを 1 つ選べ。

a. ②大きい　③食糧生産　④化石燃料

b. ②大きい　③奢侈品　④GHG 排出量

c. ②大きい　③工業関連用途　④GHG 排出量

d. ②小さい　③GHG 排出量　④化石燃料

e. ②小さい　③食糧生産　④GHG 排出量

問 3　下線部(ア)の「最小費用を第一とする原理」の立場に最も近い考え方を 1 つ選べ。

a. 250 万円の利益をあげる 100 万円のシステムを導入するプランと、450 万円の利益をあげるために 150 万円のシステムを導入するプランを比較した結果、後者を選んだ。

b. 原材料価格の高騰のため、商品の末端価格を維持することが難しくなったが、人件費を削減して生産コストを抑え、商品価格の値上げを最小限にとどめた。

c. 300 年後に受け取る 10 万円は 30 年後に受け取る 10 万円よりも効用が下がることを考慮して、遠い将来世代のために貯蓄する天然資源の量を次世代に残す量よりも割り引いて考えた。

d. 500 万円持っている人よりも 5 万円持っている人のほうが 1 万円を受け取ったときの満足が大きいであろうことを考慮して、収入の少ない人により多くの補助金を交付した。

e. 大学の学費と、高卒で働いていたら得られたであろう給料を計算すると、高卒で就職したほうが生涯獲得賃金が高くなることが分かったが、どうしても大学で学びたいことがあったので、大学進学を選んだ。

問 4　次の記述のうち、本文の主旨に最も近いと考えられるものを 1 つ選べ。

a. 排出量の分配に際しては、非協力が有利な選択肢にならないような仕組みや、各国の過去の排出量をも計算に入れた仕組みを採用すべきである。

b. 大気は万人の平等な共有財であるので、排出量は人口一人当たりの平等な割り当てにしたがって、人口比に応じて各国に配分されるべきである。

c. GHG の排出源となる活動は、食糧などの生活必需品を生産する場合もあれば、奢侈品生産の場合もあるので、それら明確に区別した排出量の配分方法を考えるべきである。

d. 寒冷地と温暖地、車社会とそうでない社会とでは化石燃料の消費量に差が出るのが当然であるので、排出量の配分を決定するに際しては、各国の地勢状況を考慮すべきである。

e. 排出量の分配に際しては、排出削減に伴う負担ないし機会費用の高低を考慮して、できるだけ低コストで多くの量の削減を達成できるようにしなければならない。

問 5　世界中の全ての個人が参加する CO_2 排出量取引の市場があったとしよう。そこでは、参加者全員に平等に排出量枠が与えられ、排出量 1kg あたりの単一価格で、排出権を購入あるいは売却することが出来る。この排出権取引市場について、本文の主旨に基づいて評価するとしたら、以下のうち最も相応しいものはどれか、1 つ選べ。

a. 資金力のある企業や国が排出権を積極的に購入できることで、CO_2 削減の努力を行わなくなる可能性があるため、望ましいとは言えない。

b. CO_2 の排出のために支払うコストが用途にかかわらず統一されるため、貧困層の生活に必要な活動を阻害する恐れがあり、望ましいとは言えない。

c. CO_2 の排出に価格がつくことによって、さまざまな排出削減対策にも価格付けがなされ、より安価な対策が選ばれることとなるため、望ましいと評価できる。

d. CO_2 の削減が排出権の売却益につながることから、将来的に削減のための技術進歩を誘発する可能性があるため、望ましいと評価できる。

e. 排出量取引の市場にはメリットとデメリットがあるので、温暖化対策としての効果が測定されない限り、一概に評価を下すことはできない。

問 6　人々のニーズと GHG 排出量が異なる 6 つのアクティビティ A〜F がある。いま仮に、それらを正確に数値化することができ、図 1 のグラフに描けたとしよう（高い数値は、ニーズが高い、あるいは排出量が多いことを意味する）。本文の趣旨に則った厳密な評価基準は必ずしも明確ではないが、考えうる幾つかの評価基準に従って、制限をかけるアクティビティに順序を付けてみたい。以下の記述のうち、評価基準と制限順序が**整合的でないもの**を 1 つ選べ。

a. ニーズを GHG 排出量に常に勝る評価基準とするならば、3 番目に制限されるアクティビティは B である。

b. GHG 排出量をニーズに常に勝る評価基準とするならば、3 番目に制限されるアクティビティは C である。

c. 本文中で述べられている「包括的条約」の基準で評価するならば、B よりも先に A が制限される。

d. ドレネンの考える基準で評価するならば、F よりも先に E が制限される。

e. 本文の主旨に沿いつつも、ニーズと排出量のバランスを見ながらアクティビティ制限を決める場合、D と F の制限順序は評価バランス次第になる。

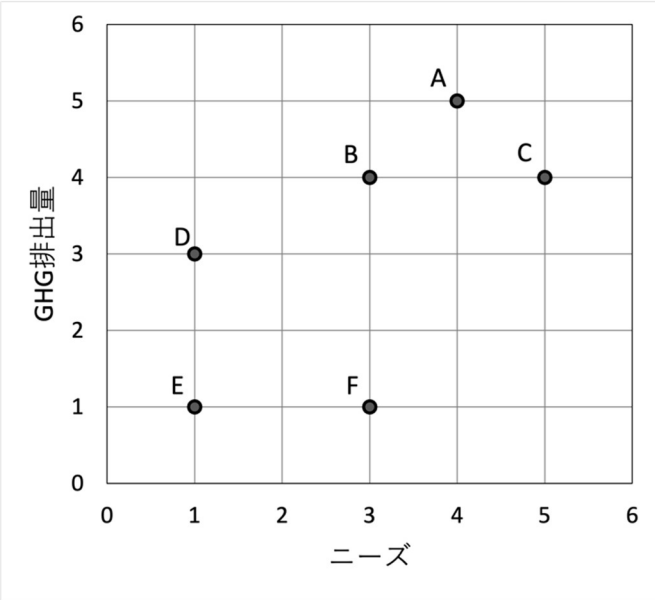

図 1

問 7　近年、温暖化の進展に伴い、世界的に気候変動による被害が深刻化している。温暖化の進展速度を遅らせるための予防的な対策とともに、すでに生じている被害への対処も喫緊の課題である。図 2 は、人口一人当たりの実質国内総生産（GDP）と CO_2 排出量を国ごとに推計し、散布図にしたものである（見やすさのために対数に変換した）。図 3 は、横軸に図 2 と同じ一人当たり実質 GDP、縦軸に旱魃や洪水などの気候災害の規模（10 万人あたりの死者・負傷者・家屋を失った者の合計）をとった散布図である。各図中の直線は回帰直線を表す。また、全ての気候災害が温暖化に起因する訳ではないが、ここでは話を単純にするために、災害の主要因が温暖化にあると仮定しよう。これら二つのグラフから読み取れる記述として、最も適切なものを 1 つ選べ。

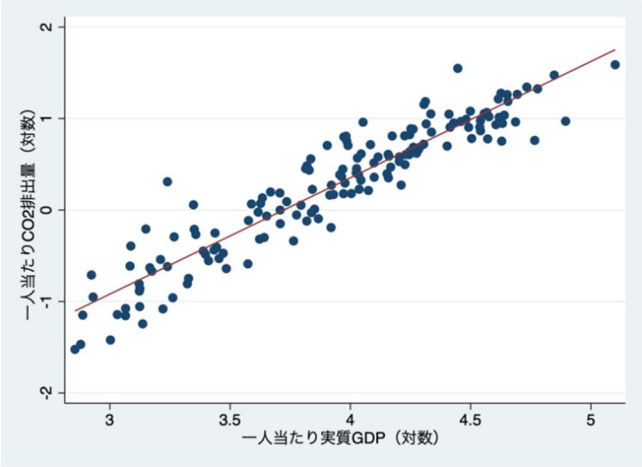

図 2

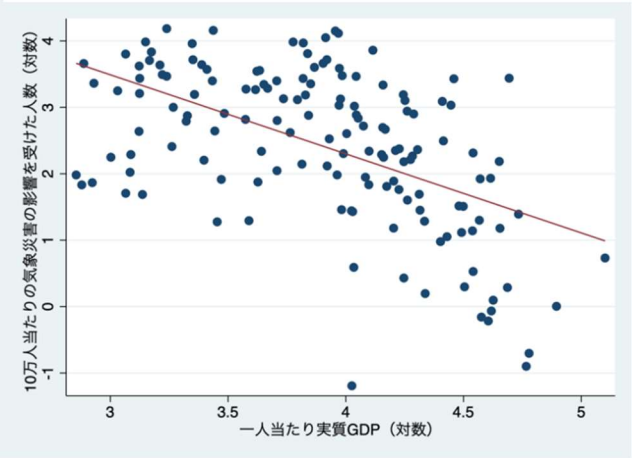

図 3

a. CO_2 排出一単位当たりの気候被害の規模を計算すると、国民の平均的な豊かさが中程度の国の排出当たり被害規模が最も大きい傾向がある。

b. 気候被害の規模に比べると、CO_2 排出量はばらつきが大きく、同程度の経済規模の国の間でも費用配分の国際協調が必要になると考えられる。

c. 気候被害が少なく抑えられている国では、一人当たりの経済的な豊かさが比較的早いペースで伸びていく傾向がある。

d. 気候変動のリスク低減及び生じた被害への対処を必要とする国は、一人当たりの所得が低く経済的な余裕がない傾向がある。

e. 温暖化による被害の規模と、GHG 排出の規模は概ねバランスしており、各国の排出削減努力は、その国の気候被害削減に繋がると考えられる。

問 8　基底的ニーズや公平性を考慮する場合、排出量の割り当てにおいては個々人の事情を勘案できるのを理想とする意見もあるが、現実的には国の単位での割り当てが国際間協調の場で議論されることが多い。その場合、国としての総排出量も重要な指標になる。図 4 は、図 2 と同じデータを用いているが、縦軸に国ごとの CO_2 総排出量を取っている。また、各国内の貧困層の比率（1 日の

生活費が 1.9 ドルを下回る人口比率）も大まかに表示しており、●で表示された国は貧困層比率が世界全体の中央値より高く、◊で表示された国の貧困層比率はそれより低い。

本文や図 2～4 を参照しつつ、温暖化対策の国際的な取り決めを話し合う場合、どのようなことに注意すべきと考えられるか？　200 字以内で論じよ。

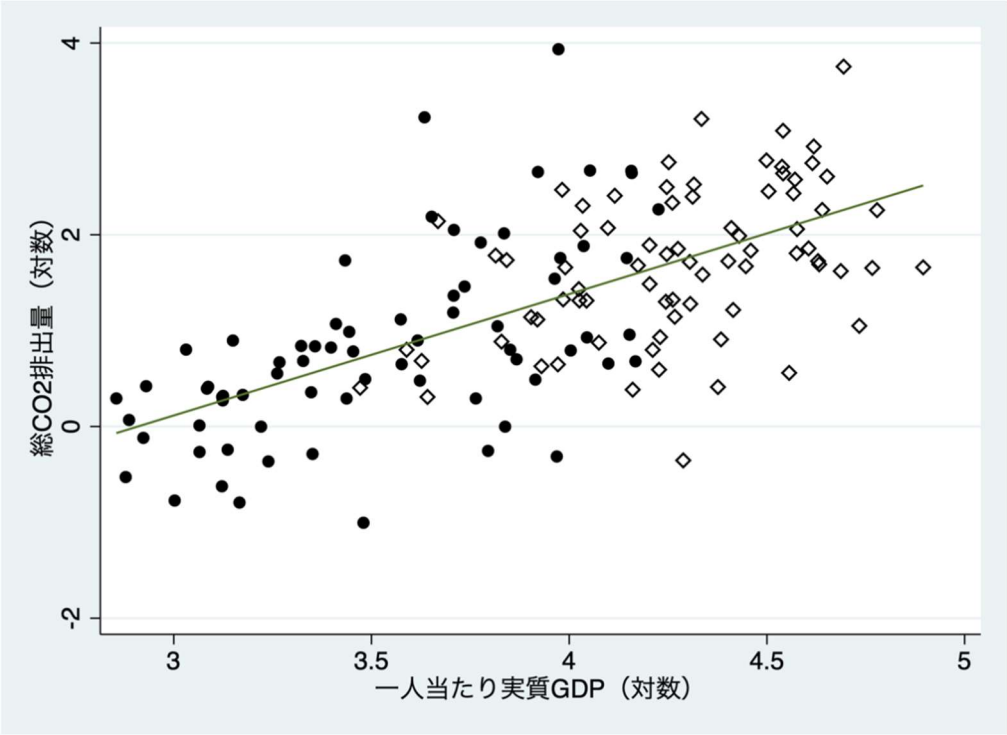

図 4

図 2～4 の作成に利用したデータは Our World in Data から取得。データは 2010 年のもの。

［ 以 下 余 白 ］